3 二代目秀吉 武将瓢箪ランプの商品化

ー関ヶ原町への恩返しー

お世話になった関ヶ原へ
ー私達ができることー

隣町の町興しに惜しみなく協力をいただいた大和食品工業さんのためにも、私達が関ヶ原のためにできることはないだろうか。今までの活動を振り返り模索した結果、**武将の家紋をモチーフにした瓢箪ランプ制作**して関ヶ原の新たなお土産にしてはどうかという案が出た。瓢箪ランプとは、乾燥させた瓢箪に無数の穴を空け、中にLEDを入れて光らせるもので、瓢箪倶楽部は３年前から継続して製作を行っている。早速、関ヶ原の観光協会に商品を置かせてもらえないかとお願いしたところ、なんと観光スポットで最も来客数の多いJ**R関ヶ原駅前の観光交流館に場所を確保していただけることになった**。関ヶ原観光協会会長への挨拶も済ませ、販売開始日時を2016年7月25日に設定して本格的に商品開発を始めることとなった。

瓢箪ランプを置かせてもらえることになったJR関ヶ原駅前の観光交流館にて

工芸品を販売する難しさ
ー試作と原価設定ー

瓢箪倶楽部はランプ製作会など、非営利での工芸品製作は経験がある。しかし、お土産として販売するためには**品質は勿論、顧客のニーズや原価**など、経済的なハードルをクリアしなければならず、食品とは違った商品開発の難しさに直面した。私達はまず、関ヶ原の土産物屋を訪れ、店舗で販売されている商品の値段をチェックし、自分たちが販売する商品の大まかな価格を設定した。また、JRや土産物店の協力を得て、**観光客に人気のある武将をリサーチ**して瓢箪のデザインに起用する武将を何名か選定した。私達は瓢箪倶楽部「秀吉」ということで、まずは豊臣側の西軍で一番人気の石田三成を筆頭に、島左近や立花宗茂を採用。また大河ドラマの影響で人気が高まっている真田幸村もランプのデザインに用いることとした。

関ヶ原駅にある家紋入りロッカー　ー使用頻度から人気のある武将を分析することができる

製　作　の　流　れ

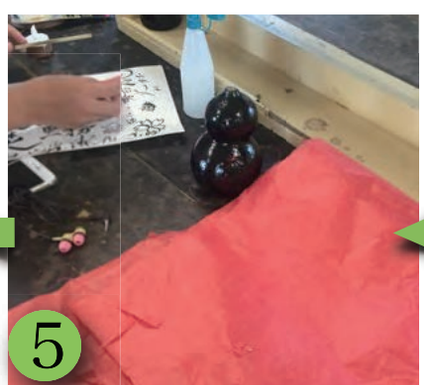
武将を分かりやすく表現するために、家紋もしくは名前を瓢箪の表面に彫り込み、ランプで光らせようと考えた私達は早速試作に入った。以下が簡単な製作の流れである。

瓢箪の表面に鉛筆でデザインを下書きする　ー写真は石田三成の家紋

ルーターという小型電動ドリルでゆっくりと彫り込む

LEDランプを入れ、光の漏れ具合を確認し適宜修正

アクリルラッカ塗料で表面を塗装



彫り込んだ部分に内側から美濃和紙を貼る

再びLEDランプを入れ、光の漏れ具合を確認して完成

受　け　継　ぐ　伝　統　の　業

失敗につぐ失敗
ー自分たちの未熟さを知るー

いざ製作を始めると、最初の下書きで球体に文字を書くことが難しく、直線を引くことさえままならない。下書きが上手くいっても、彫り込みですぐに瓢箪が割れてしまう。私達は、商品としての瓢箪工芸品を作ることがこれほどまでに大変だということを知らず、いきなり暗礁に乗り上げてしまった。

彫り込みで割れてしまった瓢箪　ー繊細な家紋のデザインは特に割れやすい

瓢箪振興会会長からの教え
ー伝統の加工技術を受け継ぐー

瓢箪の加工技術は、養老町の瓢箪振興会によって絶えることなく脈々と受け継がれている。私達は、そんな瓢箪振興会の安田さんから瓢箪栽培の指導をしていただいているが、今回は工芸品製作の技術を学ぶため弟子入りを志願した。そして、その**伝統の業を受け継ぎ、その業を次世代へと伝える**新たな瓢箪工芸品作家として瓢箪倶楽部秀吉が名乗りを上げることとなった。

使用する道具の選択から始まり、何度も線をなぞるように彫る独特な彫り方や和紙の貼り方まで、その技術を余すところ無く私達に伝えていただいた。同時に、この技術を次の世代へと伝える大切な使命も受け取った。

瓢箪振興会の安田さんが営む安田瓢箪店　ー店内は瓢箪工芸品で埋め尽くされている

安田さんが制作する瓢箪ランプ　ーこの加工技術は瓢箪の聖地・養老町で代々受け継がれてきた

完　成　報　告　会

私達高校生の感性と伝統の業が融合した世界で初の武将瓢箪ランプが完成した。最初の納品は限定１０個、価格は税込み1080円とした。観光協会への手数料を除けばほぼ原価だが、関ヶ原が少しでも活性化してもらえれば本望である。早速、関ヶ原観光協会会長を始めとした関係者の皆様を学校へお招きし、完成報告会を開催した。会長からは、**「商品も素晴らしいが、高校生が関ヶ原や養老のことを考え取り組んだこと自体に価値がある」**というお言葉をいただき、諦めずに取り組んできて本当に良かったと思えた瞬間となった。北は北海道、南は沖縄から関ヶ原へ観光に来られることもあり、この瓢箪ランプをお土産として地元へ持って帰ってもらうことで日本全国に「瓢箪の養老」と「合戦の関ヶ原」を広めることができる。**隣町への恩返しのつもりが、養老にとっても、関ヶ原にとってもwin-winなプロジェクトとなり、新しい町興しの形を発見することができた。**

完成した石田三成の家紋ランプ　ー側面には桜の花弁を彫り込んだ

武将の名前を彫り込んだランプ　ー側面には家紋が描かれた和紙を貼った

観光協会の方に商品の解説をする二代目秀吉メンバー

武将瓢箪ランプ完成記念撮影

Ｔ　Ｖ　報　道　と　そ　の　後

この取組については、大垣市のケーブルテレビで大きく報道されたこともあり、**販売開始数日で完売御礼**となるほど人気商品となった。今後は第二弾の商品として、瓢箪のサイズやデザインをさらに工夫した商品を製作する予定である。以下に番組で報道された様子を掲載する。

4 瓢箪ランプ製作キャラバン

二代目秀吉

ー次世代へ瓢箪文化を継承するー

幼稚園児や小学生と一緒に瓢箪ランプを作ろう

瓢箪振興会の安田さんより受け継いだ加工技術を次の世代へと繋いでいきたい。そう考えた私達は、町内の幼稚園や小学校に出向き瓢箪ランプ製作会を開催することにした。瓢箪ランプとは、初代秀吉から取り組んでいる町興し活動で、表面に穴を空けた瓢箪に上からLED電球を差し込みランプにするというもので、製作会で作ったランプを公民館や駅に飾ることで技術の伝承と町興しが同時にできると考えた。単純にランプを制作するだけでなく、**様々な形の瓢箪を持参して名前を当てるクイズや、秀吉の活動紹介、瓢箪質問コーナー**など、子供たちがより瓢箪文化に興味を持ってもらえるよう工夫をした。

瓢箪の名前あてクイズ　ー元気に手を挙げる園児たち

高校生が事前に穴を空けた瓢箪に園児が思い思いのデザインを施す

初めての製作会ー養北幼稚園の園児と共にー

町内の養北幼稚園の園児２８名と保護者合わせて約４０名に対し製作会を実施した。園児たちは瓢箪に興味津々で、ランプのデザインも私達では思いもよらないようなアイデアが随所に見られ、高校生ながら大変感心をしてしまった。製作の最後に部屋を暗くし、**点灯すると拍手喝采、大歓声**が上がり、初めての製作会は大成功となった。

園児にヒョウタンランプの作り方を教える川合さん（左から２人目）＝養北幼稚園で

ヒョウタン使いランプ

大垣養老高生 園児を指導

初めての製作会は新聞にも掲載された

見ていて飽きることのない瓢箪ランプが完成した

町　の　新　観　光　ス　ポ　ッ　ト

二回目の製作会は笠郷小学校
ー完成したランプは公民館で点灯ー

二回目の製作会は、養老町の笠郷小学校の児童と保護者合わせて約７０名を対象に開催した。参加人数が大幅に増えたが、幼稚園での経験を生かしてメンバー一人一人が効率よく指導に当たることができた。今回の製作会で、**高校生と児童の合作ランプが１００個完成**したため、公民館に飾ることとなった。制作した子供たちは勿論、地域の方や観光客も見に来ていただくことができ、町の新たな観光スポットを創造することができた。

瓢箪ランプ完成記念に集合写真を撮影

小学生と一緒に瓢箪ランプ製作会　　ー体育館に机を並べての開催

瓢箪ランプを実際に点灯した時の様子

児童よりも保護者が熱中するケースも

公民館に瓢箪ランプを飾り、町の新たな観光スポットを創造

町　民　が　集　う　場　の　創　造

公民館を貸し切り、一般の方向けに瓢箪ランプ製作会を開催

二回の製作会を終え、児童よりも保護者の方が熱中して瓢箪のデザインをされる様子が散見されたこともあり、一般の方向けにも製作会を開催しようという意見が出た。そこで、養老町役場組合の方に協力をしていただき、町内で瓢箪ランプに興味のある方を募集したところ約２０名ほどの参加者に集まっていただくことができた。さっそく、養老町中央公民館をお借りして製作会を開催した。製作が始まると、やはり大人でも熱中してしまうらしく、どの参加者も黙々と瓢箪に穴を開けて自分好みのデザインを施していた。約２時間ほどの製作会はあっという間に終了したが、最後に参加者の方から**「毎年この製作会を実施して欲しい。町民が集まり絆を深める貴重な場になる」**というお言葉をいただいた。私達は、瓢箪ランプを飾ることで町興しにつながると考え活動をしていたが、制作会を設けること自体に、町民同士の絆を深める場を提供するという重要な役割があることに気がついた。町民の誰もが「養老町の冬といえば瓢箪ランプ」と思えるような定番イベントとして認識してもらえるよう、今後も定期的に開催をしていきたい。

ヒョウタンで「祭」を明るく

養老改元1300年祭に彩りを添えようと、養老町職員組合は20日、町中央公民館で、町のシンボルのヒョウタンで電飾作りをした。

組合員14人が中身をくりぬいた長さ10㌢のヒョウタン50個に電動ドリルで穴を開けていった。体育副部長の林容子さん(31)は「表面が意外と軟

でいた。大垣養老高校のサークル「瓢箪倶楽部秀吉」と、ＮＰＯ法人ヨロストも協力した。同サークルの西脇未来さん(18)は「1300年祭をみんなで盛り上げたい」と話した。

来年２月末までに1300個を作り上げ、1300年祭に向け町内各地で点灯展示をしていく。（平井剛）

電動ドリルでヒョウタンに穴を開ける組合員と大垣養老高の生徒ら＝養老町石畑で

この製作会は新聞でも大きく取り上げられた

高校生が指導役となり製作会を実施　ー地域の方が同じ場所で一つのことに取り組むことで絆が生まれた

瓢箪をLEDで連結し、一つの大きなイルミネーションに

最後に記念撮影をして、毎年開催することを宣言

5 二代目秀吉 瓢箪を通した国際交流

ー養老の瓢箪文化を世界へ発信ー

ドイツの留学生が養老町にやってきた

養老町は昭和６２年度より毎年、それぞれの文化紹介を通して友好都市であるドイツのバッドゾーデンアム タウヌス市（Bad Soden am Taunes)との交流を深めている。今年の８月には、ドイツから１０名の留学生が養老町に訪れ約２週間ほど滞在するとのことで、町から是非秀吉の皆さんに**ドイツの方へ瓢箪ランプ製作会を実施し、養老の瓢箪文化を伝えて下さいという依頼**が舞い込んだ。私達としては実績が認められ、依頼が来たことに大変嬉しさを感じたが、言葉の壁が大きく隔たっていることに不安を覚えた。ドイツの留学生は私達と同じ高校生で、英語が多少話せるが基本はドイツ語だという。英語も片言しか話せない私達だったが、養老の瓢箪文化を世界に発信するチャンスだと思い、製作会の開催を決めた。

瓢箪で言葉の壁を越える ーインバウンドへの可能性もー

小学校の体育館をお借りし、ドイツの留学生に対して瓢箪ランプ製作会を実施した。始まるまではどのように教えたら良いのかが分からず大変不安だったが、私達の作った見本のランプを見せると感激していただくことができ、すぐに作り方を理解してもらうことができた。製作会は盛況のうちに終わり、完成したランプは丁寧に梱包してドイツへお土産として持ち帰っていただいた。
海外の方にも楽しんでいただけることが分かり、今後は養老町独自のインバウンドプランとして発展させていきたい。そしていずれは世界中に養老の瓢箪文化を発信したいと考えている。

見本のランプで作り方を説明

瓢箪を通して実現した国際文化交流

時間を忘れて熱中するドイツの高校生

瓢箪ランプはドイツへのお土産に

6 二代目秀吉 養老町瓢箪補完計画

ー苗１３００株無料配布の実施ー

養老町から瓢箪が枯渇する異例の事態
ー活動規模の拡大による弊害ー

瓢箪ランプ製作会が好評で、回を重ねるごとに参加人数も増えていった。私達が圃場で栽培した瓢箪も使いきり、瓢箪振興会の安田さんに協力を求めて足りない瓢箪を補っていたが、それもついに無くなってしまった。養老町から工芸品の瓢箪が消えるという、町始まって以来の大事態は新聞にも大きく掲載されるほどだった。記事を見た方の中には秀吉宛に瓢箪を寄付していただける方もあり、町民の皆さんの心強い協力がとても嬉しかった。そして、この事態を何とか改善するべく、役場とNPO法人の方がタッグを組んで協力いただけることとなった。

ランプ作り体験人気
実不足 痛しかゆし

ヒョウタンの実は工芸などに使われ、養老町ではランプの置物作りが盛んだ。各地で開かれる体験教室も人気で、実が不足する事態も起きている。

大垣養老高校のサークル「瓢箪倶楽部秀吉」が七日に開いた教室には、養老町と海津市の小学生五十七人が参加。絵付けを施し、思い思いのランプ作りを楽しんだ。

同校では昨年、二百個の実を収穫したが、各地で教室を開いたため在庫はほとんどゼロ。サークル顧問の青木祐太さん(三〇)は「不足分を町内の業者から買い付けた」と明かす。

ランプ作りに励む児童。工芸用のヒョウタンが減っている＝養老町笠郷小で

する教室でも在庫不足が生じており、今年の実が集まる十一月ごろまで新規の体験受け付けを中止している。吉田圭吾さん(三三)は「思わぬ人気で痛しかゆしだが、ヒョウタン文化が養老に根付けばありがたい」と話している。

瓢箪の聖地・養老町で瓢箪が枯渇するという前代未聞の事件を掲載する記事

三位一体町興し同盟再び
ー役場、NPO、秀吉が協力して苗配布ー

養老町で足りない瓢箪は養老町で補完する。そのために、役場とNPO法人ヨロストが千成瓢箪の苗を１３００株用意して町民に無料配布するという企画を立ち上げた。もちろん、私達秀吉メンバーも配布に協力。初代秀吉の活動以来の三位一体町興し同盟として共にこの企画を成功させるために奮闘した。苗の生産に必要な資金は役場が快く提供していただき、育苗の場所や施設はNPO法人や町内の農家さんに協力をしてもらいながら準備を進めていった。配布数は来年に迫った改元１３００年祭にちなみ１３００株として、実った瓢箪はNPO法人で買い取りをしてもらい、ランプ製作などで使用していく予定である。

用意された瓢箪の苗

瓢　箪　で　エ　コ　活　動

JAにしみのファーマーズマーケットで苗の配布会を実施

苗の準備ができたところで早速配布会を開催した。地元のJAが夏祭りイベントを実施するということで、テントを一つお借りして来場者に苗を配布した。親子連れや若い方にも興味を持ってもらえるよう、瓢箪の絵付け体験も同時に行った。立ち寄っていただけるお客さんは瓢箪を育てたことがない人が大半で、簡単に栽培の方法をレクチャーしながら配布を行った。この日だけで１００株ほど配ることができ、残りは養老町の商店に依頼をして苗を置かせていただくこととなった。当初用意した１３００株はあっという間になくなり、急遽苗を追加して最終的には２０００株以上を配布することとなった。養老町の人口は約２万８千人であり、いずれは人口と同数の苗を配布したいと考えている。

JAのイベントに苗配布＆絵付け体験ブースを出展

初心者でも育てられるよう、栽培マニュアルで解説

瓢箪でエコ活動
瓢箪グリーンカーテンコンテストの開催

苗を受け取っていただいた方には、やりがいを持って最後までしっかり育ててもらいたい。そんな思いから、JAや役場から賞品を出していただき、瓢箪グリーンカーテンコンテストを開催することとなった。私達も学校で瓢箪を栽培してコンテストを盛り上げるとともに、幼稚園や小学校などに赴きグリーンカーテン設置についての協力活動を行った。地域住民が一丸となってコンテストに取り組むことで、町の環境負荷を減らしつつ景観造りにも繋がると考えられる。

養老町だけでなく、瓢箪で作ったグリーンカーテンを世界中から参加を募った